〈青森県史〉の窓 171

中南津軽を象徴する川と温泉

中園　裕
（県民生活文化課 県史編さんグループ主幹）

浅瀬石川沿いに連なる板留の集落と共同浴場の「中の湯」（写真右下の建物）
＝1950年代・青森県所蔵県史編さん資料

1878（明治11）年の郡区町村編制法で、青森県の津軽地域は東・西・中・南・北津軽の5郡に分けられた。その中で「中南」津軽は歴史的に交流が深く、社会的にも類似する環境下にある。弘前市を入れて「中弘南」、黒石市を加えて「中弘南黒」と呼ばれることもある。

中南地域は津軽平野に位置し、雄大な岩木山が眼前に広がる。山は信仰の対象でもあり、お山参詣に代表される祭礼行事が継承されてきた。しかし、この地域の歴史を知るには、岩木川と支流の浅瀬石川や平川について語らねばならない。

岩木川は岩木山麓の西目屋村から相馬・岩木の両地区を流れ、弘前市の中心街を横目に見ながら藤崎町へ向かう。その後、西・北両津軽郡の境界線の役割を果たしながら十三湖へと行き着く。東津軽郡以外の各津軽郡を縦断する岩木川は、津軽地域を象徴する川として相応しい。

浅瀬石川は十和田湖に近い平川市の奥深くに端を発し、黒石市と田舎館村を横断し、藤崎町で平川と合流する。河岸には「黒石十湯」と称される数多くの温泉が湧き出て、戦前までは湯治場として、戦後以降は観光地としてにぎわった。

平川は碇ヶ関地区から大鰐町内へと流れ、弘前市と平川市の境となり、田舎館村を横目に藤崎町で浅瀬石川が合流。その後、すぐに岩木川へと合流する。旧碇ヶ関村の河川敷に湧き出る温泉洗濯場とプールや遊園地は村民の語り草だった。

大鰐町では平川に架かる多数の橋が温泉情緒を演出している。藩政時代から明治末期にかけて藤崎町の藍は平川の川縁が干し場だった。浅瀬石川と平川は、南津軽郡各地域の歴史を形成する上で大きな役割を果たしてきたのである。

弘前市は戦前まで第8師団を有する軍都と称され、戦後は師団の敷地跡に弘前大学や各種の学校が集まり学都と称された。弘南鉄道が黒石と弘前、大鰐と中央弘前とを結び、弘前市内から中南津軽各地へ弘南バスの路線網が広がり、通勤通学で多くの人びとが弘前市に集まる。弘前市は中南地域を統合する存在であり、それは今も変わらない。

温泉は中南地域を象徴する存在だ。浅瀬石川沿いの黒石温泉郷と平川沿いの大鰐碇ヶ関温泉郷は、いずれも温泉郷の名前を冠した県立自然公園である。また、1960年代以降の黒鉱開発でボーリングの結果、温泉が湧出して公衆浴場となった施設が旧平賀町内を中心に多数存在する。

しかし、黒石十湯の中で二庄内・沖浦の両温泉はダム底に沈み、要目・古蔵の両温泉は周辺の開発によって実質的に廃湯同然となった。碇ヶ関地区の湯の沢温泉郷は、老舗の温泉旅館が後継者難や人手不足、宿泊客の伸び悩みなどで実質的に姿を消した。温泉施設を大切に守っていくことは、中南地域の歴史と個性を守る上で大事な鍵になると思う。